



メキシコ合衆国における冠婚葬祭事情



CONTENTS

INTRODUCTION

- 3 レポート制作にあたって
- 4 メキシコ合衆国の基本情報
- 5 中南米最大の都市である首都メキシコシティの紹介
- 6 先住民文化の魅力溢れる都市オアハカの紹介
- 7 世界遺産の街である古都グアナファトの紹介
- 8/9 メキシコにおける主な宗教と歴史

WEDDING

- 10 メキシコ全土における結婚式の伝統や文化
- 11 メキシコシティの結婚式の特徴
- 12 オアハカの結婚式の特徴
- 13 グアナファトの結婚式の特徴

FUNERAL

- 14 メキシコ全土における葬儀の歴史や葬儀ビジネス
- 15 メキシコシティの葬儀事例と特徴
- 16/17 オアハカの葬儀事例と特徴
- 18 グアナファトの葬儀事例と特徴

RITE OF PASSAGE

- 19 メキシコの通過儀礼
- 20/21 「死者の日」の解説

PLACE TO VISIT

- 22/23 各都市の結婚式場や葬儀場などの紹介

レポート制作にあたって

昨今の社会環境変化により、地域社会は無論、家族の間でさえも「つながり」が希薄になっていく中で、冠婚葬祭儀式は簡素化の傾向が強くなり、事業としての問題もさることながら、儀式文化の消失、無縁社会の広がりを憂慮する状況にあります。こうした背景の中、アジア諸国の儀式文化や冠婚葬祭業の趨勢を知ることで、日本の儀式文化継承やこれからの業界の方向性についての参考になればと考え、これまで「アジア冠婚葬祭業国際交流研究会」として、アジア6か国の視察調査を行ってまいりました。

昨年、冠婚葬祭総合研究所が一般財団法人冠婚葬祭文化振興財団に移行したことに伴い、この研究会についても、儀式継創委員会において改めて検討され、その意義を再確認するとともに、アジアに限定せず幅広く世界をみるべきということから、新たな視察先としてメキシコが選定されました。

メキシコというと明るさに満ち溢れ、ラテン系、中米の遠い国という印象があります。しかしながら、メキシコに注目した理由は、2年前に大ヒットしたディズニー映画「リメンバー・ミー」にあります。これは、「死者の日」を描いたものですが、印象的だったのは、「死後も『死者の国』で暮らしていけるが、生者から忘れられると、二度目の死が訪れ完全に消滅する。」「遺影写真が飾られていれば、死者は年に1度『死者の日』に生者のもとに帰ることができる。」という「死者とのつながり」を大切にしたい風習です。ストーリー全体も「家族や祖先とのつながりや想い」を描いたものですが、注目したのはこれが若い世代も含めて幅広く支持をされたということです。「つながり」が希薄化していく最近の趨勢の中、業界としても参考になるものがあるのではないかと考えています。

こうした国、メキシコの儀式文化とその背景となる生活、風土等が理解できるよう、株式会社 Encounter Japanの代表取締役であり、現地在住の西側起史氏にご協力頂きこの冊子を作成いたしました。メキシコの「死者の日」は毎年11月1、2日に行われます。コロナ感染症拡大の影響がどこまで続くのか想定はできませんが、多くの皆様がメキシコに関心を持って頂き、一緒に「死者の日」のメキシコを訪ねることができればと考えております。

冠婚葬祭総合研究所

メキシコの簡単な歴史および

国の成り立ちメキシコの地図を交えて

- 1519年
エルナン・コルテスの率いるスペイン人が侵入
- 1810年
メキシコ独立運動の開始
- 1821年
スペインより独立
- 1846年
米墨戦争
国土の半分近くを米国に割譲
- 1910年
メキシコ革命勃発
- 1917年
現行憲法公布
- 1938年
石油産業の国有化
- 1982年
債務危機発生
- 1986年
GATT加盟
- 1993年
APEC参加
- 1994年
メキシコ革命勃発
- 2000年
フォックス大統領就任
(71年続いた制度的革命党(PRI)政権の終焉)
- 2006年
カルデロン大統領就任
(第65代大統領)
- 2012年
ペニャ・ニエト大統領就任
(第66代大統領)
(PRIが政権に復帰)
- 2018年
ロペス・オブラドール大統領就任(第67代大統領)



メキシコ基本情報

国名	メキシコ合衆国
首都	メキシコシティ
国土	1,964,375 km ²
人口	約1億2,619万人 (2018年世界銀行)
平均年齢	28歳
公用語	スペイン語
宗教	約91%カトリック
人種	先住民とスペイン系白人の混血約60%、先住民約30%、スペイン系白人約9%、その他1%
政治	立憲民主制による連邦共和国

健康水準・医療水準を示す主な指標

	男性	女性
平均寿命(2015年)	73.9歳	79.5歳
健康寿命(2015年)	65.7歳	69.1歳
5歳以下の乳幼児死亡率 1,000人あたり(2015年)	13.2人	
妊産婦死亡率 10万人あたり(2015年)		38人
18歳以上の人口に占める 高血圧注1)患者の割合 (2015年)	22.3%	17.3%
18歳以上の人口に占める 肥満注2)の人の割合 (2014年)	63.1%	65.6%
15歳以上の人口に占める 喫煙者の割合(2013年)	22.5%	7.3%

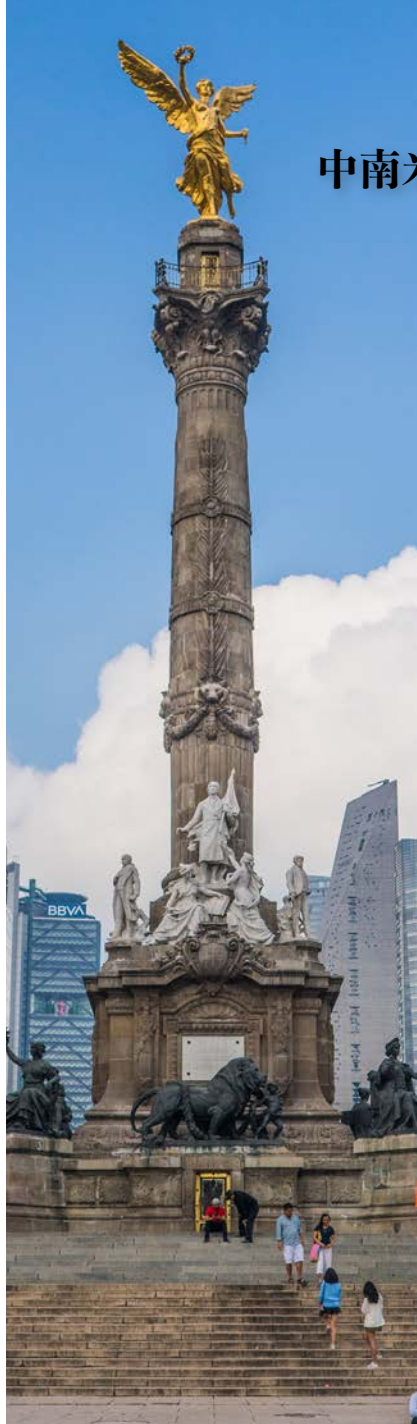
(注1)収縮期血圧(SBP)140以上もしくは拡張期血圧(DBP)90以上を高血圧とする注2)BMI25以上。BMIは「体重(kg)÷(身長(m)×身長(m))」で算出される。
 (出所)世界保健機関(WHO)「Global Health Observatory(GHO)data」
 (出所)経済産業省 平成31年度国際ヘルスケア拠点構築促進事業メキシコ篇
 (出所)外務省ホームページ メキシコ合衆国基礎ページ

中南米最大の都市である首都メキシコシティの紹介

目覚ましい経済発展を遂げるメキシコ合衆国の首都「メキシコシティ」は人口約892万人、都市人口約2,000万人の大都市。日本の民間研究所が2016年に発表した「世界の都市総合力ランキング」では世界で37位の都市とされ、ラテンアメリカ地域の中では首位に位置する。標高約2,240m、周囲を山に囲まれた盆地に都市が形成されている。

メキシコシティの歴史について

近代都市の裏側には、かつてのアステカ王国時代の繁栄とスペイン植民地時代の歴史の名残を残している。嘗てメキシコシティは、アステカ王国の時代には湖上に浮かぶ大きな都市であった。13世紀末にテスココ湖が広がるのみだったメキシコ盆地をアステカ人が開拓し、1325年に島を作り上げ、その土地に都を築いた。最盛期には人口が20～30万人の規模となり、ピラミッドが築かれるほどの壮麗な都市となった。16世紀初頭にスペインがアステカ王国を侵略し、1521年にスペイン人のエルナン・コルテスによってアステカ王国は滅ぼされた。その後スペインが植民地化を進めていく中で、アステカ王国の神殿や宮殿を破壊し、破壊された宮殿の資材を用いてスペイン風のコロニアルな街並みが築かれた。同時にテスココ湖の埋め立てが行われ、東部以外は全て埋立地となった。1535年にはスペインの副王が統治する「ヌエバ・エスピーニャ」がこの地に創設され、現在のソカロ広場(中央広場)周辺を中心とした歴史地区にその首都が設立された。



世界遺産にも登録されているソカロ広場

引き継がれる歴史と文化

メキシコシティは現代的な側面とアステカ王国からスペイン統治時代の名残を併せ持ち、世界中の人々の関心を惹きつけている。現在のメキシコシティで垣間見ることができる名所や引き継がれる文化を紹介する。

① ソカロ広場(中央広場)

16世紀にスペイン軍によって壊されたアステカ王国時代の神殿跡地に造られた中央広場。周辺には破壊された神殿の石材を用いて、先住民族によって建設されたメキシカン・バロック様式の「メトロポリタン大聖堂」がある。

② ルチャリブレ

メキシコ人の週末の楽しみの代表格がメキシカンスタイルのプロレス「ルチャリブレ」。メキシコのルチャリブレの歴史は長く、1863年に始まったと言われている。「正義=庶民や先住民」対「悪=特権階級や入植者」という分かりやすい構図から、メキシコの庶民に長く愛されてきた。

③ 国立人類学博物館

世界でも有数の規模と内容の豊富さを誇る博物館。マヤ文明やアステカ王国の発掘品の他、メキシコ各地の歴史的な文化財が展示されている。中でも太陽の石「アステカ・カレンダー」はアステカ人の神秘的な宇宙観を表現しており人気だ。



アステカ・カレンダー



先住民文化の魅力溢れる都市オアハカの紹介

オアハカ州の州都オアハカ市はメキシコの南東部、標高1,555mの高地に位置する。同州は先住民文化が色濃く残る地方として知られており、昔ながらの文化や風習を守る先住民の生活を垣間見ることができる。1987年にはカラフルなコロニアル建築が軒を連ねる歴史地区と、中央アメリカ最古の遺跡と言われているモンテ・アルバン遺跡がユネスコの世界文化遺産に登録された。また初めて先住民から大統領に選出されたメキシコの国民的英雄ベニート・フアレスはオアハカ州の出身である。

スペインの侵略を通じて失われた先住民の命と文化

スペイン植民地時代より以前はサポテカ族、ミステコ族の文明が栄えていた。その後スペインが侵攻し、1521年からスペイン人による支配が始まる。1528年にはドミニコ修道会が街の中心に教会を建て、先住民の宗教観を奪い支配を試みた。サポテカ族や、ミステコ族たちは戦いを避けようと交渉をしたが、スペインはこれを拒否し、先住民に古代の習慣を忘れさせるために法典を燃やし、神殿を破壊した。

先住民はスペイン軍によって過酷な労働を長年に亘って強いられることとなる。またヨーロッパから持ち込まれた天然痘ウイルスによって大量の先住民の命が奪われ、1520年には150万人前後いた人口が、1650年には15万人まで減少したと言われている。

オアハカ州の現在の人口は約396万人。その内先住民が約40%を占めており、先住民の割合がメキシコ国内で最も高い州である。オアハカ州にはサポテカ族、ミステコ族、マサテコ族など様々な先住民が暮らしている。昔から受け継がれてきた伝統を守る先住民とメスティーソ(白人と先住民の混血)が共存する町だ。

メキシコきっての「美食の街」

オアハカはメキシコ国内でも独特な食文化を持ち、「美食の街」として知られている。新鮮で豊富な食材に恵まれ、先住民文化が食文化に強い影響を与えている。オアハカを代表する郷土料理を3つ紹介する。

① モーレ

カカオ発祥の地として知られているメキシコ。チョコレートをたっぷり使ったモーレはメキシコ料理の最高傑作と言われている。



② チャプリネス

チャプリネスは3,000年以上の歴史を持ち、メキシコで人気の軽食として親しまれている。バッタを唐辛子や塩、レモンで味付けしている。チャプリネスという名は先住民のひとつ「ナワトル語」が由来。



③ メスカル

オアハカ名産のお酒がメスカル。テキーラと類似した製法でアガベから作ることができる蒸留酒です。メスカルは度数の高さ(38~45度)と豊富な種類のフレーバーが特徴的で、老若男女問わず親しまれている。

世界遺産の街である古都グアナファトの紹介

宝石箱をひっくり返したような、コロニアル調の世界遺産の街

グアナファト州の州都グアナファトはメキシコの中部、標高2,012mの高地に位置し、町全体が世界遺産に登録されているコロニアル都市。16世紀にスペイン人が銀脈を発見し、町をつくり、そして鉱山都市として発展を遂げた。また1810年に起こったメキシコ独立戦争の口火を切った舞台としても知られている。近年では、ディズニーピクサーの映画『リメンバー・ミー』の舞台として注目を集め、カラフルな町並みが人気の観光都市として世界中から観光客が訪れている。

グアナファト市の歴史

1540年代にスペイン人が豊富な銀鉱脈を発見し、グアナファト市を築いた。銀によって町に富がもたらされ、美しく豊かな町が誕生する。18世紀には世界の3分の1の銀を産出する都市として、グアナファトが世界中に名を馳せることになる。1810年にスペインからの独立戦争（メキシコ独立戦争）が起こると、後に国民的英雄となる司祭ミゲル・イダルゴが立ち上がり、原住民や農民たちを従えてグアナファトへ進撃。現在はグアナファト州立博物館になっている建物（アロンディガ・デ・グラナディータス）が舞台となり、スペイン軍とイダルゴ率いる解放軍と激しい戦いを繰り広げた。城にこもったスペイン軍に対し、解放軍は火を放って多くのスペイン兵を焼き殺し、解放軍がスペイン軍に初めて勝利した戦いとなった。

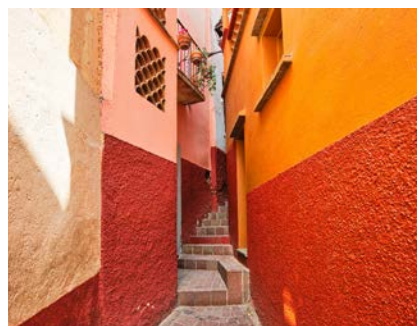


観光都市グアナファト

グアナファトの美しいコロニアル調の町並みやカラフルな家々、石畳の道は世界中の観光客を魅了している。一度グアナファトの街に足を踏み入れると、まるでお伽話に出てくるような風景の虜になっていく。グアナファトの有名スポットを3つ紹介する。

① ピピラの丘

グアナファト市内の街を一望できるビューポイント。昼間は「まるで宝石箱をひっくり返した様な景色」を堪能できる。夜は町の照明が光り輝く絶景が広がる。ピピラの像はメキシコ独立戦争で活躍した坑夫がモデルである。



② 口づけの小道

この小道は非常に狭く、向かい合った2つの家のバルコニーからキスできるほど近接している。犬猿の仲だった2軒の家の息子と娘が恋に落ちてしまい、夜に2階の家の窓から身を乗りだし、口づけを交わしていたという言い伝えが存在する。

③ アロンディガ・デ・グラナディータス
グアナファトのメキシコ独立戦争の舞台。この建物を要塞として政府軍とイダルゴ神父率いる解放軍との激戦が繰り広げられた。現在はグアナファト州立博物館となっており、古代遺跡からの出土品や独立戦争、メキシコ革命に関する展示が見学できる。またイダルゴ神父を描いた壁画は必見である。



地下水路や銀の坑道として造られた地下トンネルが公道として市民に使用されている



メキシコにおける主な宗教と歴史



歴史ある壮大なメトロポリタン大聖堂

メキシコの主な宗教とカトリック教会

カトリック教会とは、ローマ教皇を中心として全世界に約13億人の信徒を有する世界最大のキリスト教の教派。その中心をローマの司教座に置くことからローマ教会、ローマ・カトリック教会とも呼ばれる。メキシコは全人口の約91%がカトリック教徒であり、スペイン語圏において最もカトリック教徒が多い国である。またメキシコはブラジルに次いで、世界で2番目にカトリック教徒が多い国であることでも知られる。

スペイン支配時の先住民族の改宗の歴史

メキシコのカトリック教会の歴史は1521年のスペインによるメキシコ及び先住民族の支配から始まる。スペインはメキシコを植民地化すると同時に先住民族のキリスト教への改宗を行った。スペイン人は先住民族の神々をカトリックの教義へ変えるために、先住民族の神殿を破壊し、破壊した神殿の上にカトリックの教会や大聖堂を建設した。しかしながら暴力や虐殺を伴う強制的な改宗に対する先住民族の反発が数多く起こったことから、司祭はカトリックの本質を説き改宗させる事は非常に困難であると考え、先住民族の宗教のある程度の許容や類似性の強調など妥協点を探り布教活動を行ったのである。

メトロポリタン大聖堂と先住民文化破壊の歴史

メキシコシティのソカロの北側にあるメトロポリタン大聖堂はメキシコ全てのカトリック教会を統括する総本山である。メトロポリタン大聖堂がある場所には、アステカ王国の神話の最高神のひとつ「農耕・文化・知識の神」ケツァルコアトルの神殿があった。スペイン人は神殿を破壊し、メトロポリタン大聖堂はその石材を使い建設された。カトリックを速やかに根付かせるために、先住民の神々を祀っている神殿を破壊してカトリック教会を建設する手法が中南米各地で行われた。



メキシコで愛される「グアダルーペの聖母」

メキシコのカトリック教会を理解するうえで、「グアダルーペの聖母」は欠かせない。グアダルーペの聖母はメキシコカトリックのシンボルであり、国民から最も敬愛されている聖母である。メキシコではグアダルーペの聖母の絵画や像が、教会だけでなく市場や民家などあらゆる所に飾られている。メキシコのグアダルーペの聖母の特徴は、肌の色が「褐色」という点である。当時のメキシコ人の肌の色と褐色肌のグアダルーペの聖母が重なり、キリスト教への信仰や愛着を一層高めることになったと言われている。

奇跡のマントとその伝説

メキシコにはグアダルーペの聖母にまつわる伝説がある。グアダルーペの聖母は、1531年12月9日、メキシコシティのテペヤックの丘で先住民ファン・ディエゴの前に現れた。先住民の様な褐色の肌の聖母は、「司祭のもとへ行き、この地に教会堂を建てるように伝えよ」と告げる。しかし先住民ディエゴが懸命に説明しても、司祭は彼の話を一向に信じようとはしない。そんな彼のもとに再度聖母が現れ、12月に咲くはずのないバラを与えた。ディエゴはバラをマントに包み再び司祭のもとへ行き、司祭の前でマントを広げると、マントに褐色の肌を持ったグアダルーペの聖母の姿が映し出された。司祭はマントに浮かび上がったグアダルーペの聖母を見て、ディエゴの話信じグアダルーペの寺院が建てられたという。



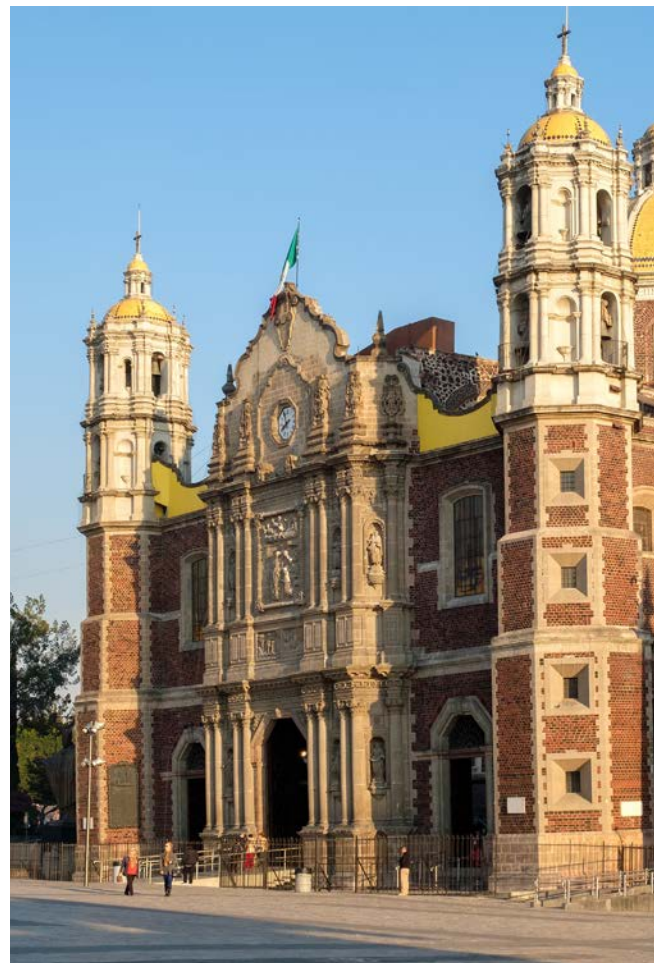
グアダルーペの聖母



グアダルーペ寺院（新聖堂）の外観

グアダルーペ寺院

メキシコシティの北部にある信仰熱心なメキシコ人、特に貧しい先住民の人々から強い信仰を集めるグアダルーペ寺院。スペイン軍の侵入以前に神殿があったテペヤックの丘を占有する広大なカトリック寺院である。メキシコ国民が敬愛するグアダルーペの聖母や褐色肌の聖母が描かれた「奇跡のマント」が飾られている。日曜日のミサには多くの参拝者が訪れ、メキシコ人の信仰心の深さを目の当たりにすることができる。



メキシコ人にとって重要な
信仰の地であるグアダルーペ寺院



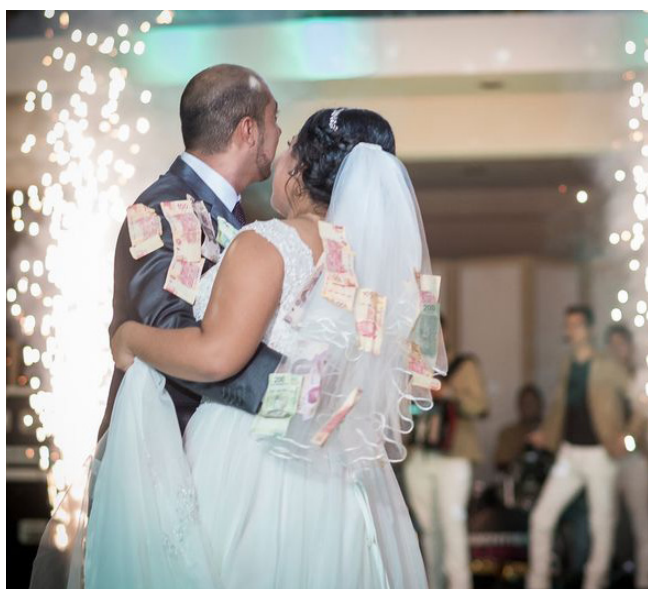
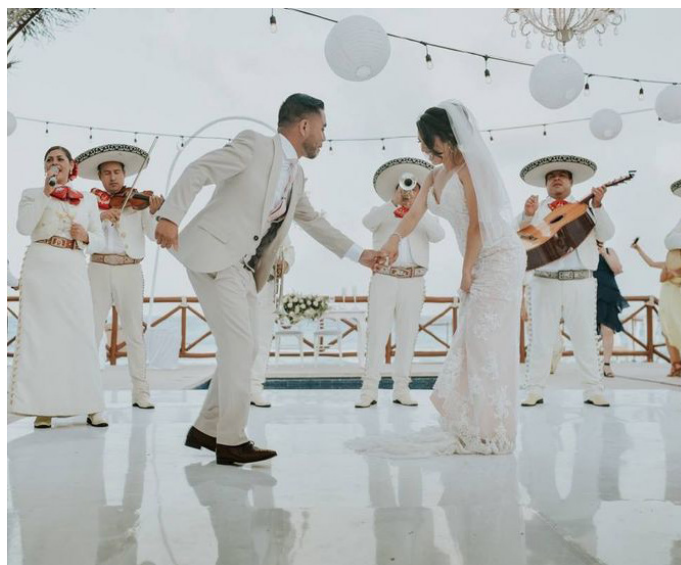
メキシコ全土における結婚式の伝統や文化

メキシコで最も一般的な結婚式は、人口の約91%を占めるカトリック教徒によるカトリック教会での挙式である。メキシコ国内のリゾート地であるカンクンなどのビーチでカジュアルに挙式を行うカップルが都市部の若者を中心に年々増加しているが、一般的な挙式は新郎の在住地や出身地で行われることが殆どである。ただし先住民民族が未だに多く生活しているオアハカ州をはじめとした南東部などでは、未だに先住民民族の文化や慣しに沿った結婚式が行われている。

またメキシコを含めたラテンアメリカ諸国では、披露宴が夜19時前後から始まり、夜中の2時や3時、時には翌朝まで続くことも特徴的である。老若男女問わず、深夜まで歌を唄ってダンスを踊り続ける光景は日本の披露宴や二次会のパーティなどの光景とは大きく異なり、興味深い。

マリアッチ楽団の演奏とダンス

メキシコではマリアッチ楽団が披露宴に訪れ、演奏を披露する。音楽に合わせて新郎新婦が舞台上でダンスを披露するだけでなく、親戚や友人など参加者全員が音楽に合わせてダンスする。「マリアッチ楽団」とは、メキシコの音楽を演奏する楽団のことを指すが、その語源に関して、フランス語で結婚を意味する「マリアージュ」が訛って「マリアッチ」に変化したという説もある。19世紀、フランスの兵士がメキシコの結婚式の様子を見かけて「あれはなんだ」と問いかけた際に、「マリアージュ」と言われたのを誤って聞き取り、それを「楽器」と認識してそのまま広まってしまったという。



エル・バイラ・デ・ビジェーテ

El baile de billete バイラ(踊り)・デ・ビジェーテ(お札)はメキシコ独自のユニークな文化である。新郎新婦の新しい生活への生活資金のサポートや、新婚旅行の費用補助を目的に行われるもので、結婚披露パーティの中で新郎新婦が参加者のテーブルへ移動する際に、参加者に対し、お札を新郎新婦の衣装に安全ピンで留めるようお願いする。その後、お札が衣装に散りばめられた状態で参加者にダンスを披露してみせるといったものである。

メキシコシティの結婚式の歴史や特色

2007年から2015年の間で、メキシコシティ市内にて18才以下の女性が1万人以上も結婚していた事実を受けて、メキシコシティ市は2016年、18才以下の結婚を法的に禁止した。憲法によれば、双方の両親の承諾があれば女性は14才、男性は16才の時点で結婚できることになっているが、これらの年齢では人間として未熟であることや、望まれない結婚の発生を防ぐために当改正が行われた。

これらの法改正や近代化を通じて、現在メキシコシティでは逆に晩婚化が進んでいる。メキシコ国立統計地理情報院(INEGI)の発表によると、メキシコ全土での初婚年齢は男性が29歳、女性は26歳であるものの、メキシコシティの平均は男性が33歳、女性が30歳と報告されている。



メキシコシティでは中間層以上の国民や富裕層の人口数が他都市と比べて多いことから、以前はスペインや米国などの海外で大規模な披露宴を行うことが人気であったものの、昨今はメキシコ国内のカンクンやロスカボスなどのビーチリゾートで挙式および披露宴を行うカップルが増加している。その他の都市では、男性の出身地で結婚式を行うという古くからの慣習が依然として続いており、それと比べるとメキシコシティ出身者の嗜好は年々変化していることが分かる。またメキシコシティでは、教会での結婚式は行わず、ラグジュアリーなレストランを貸し切って披露宴のみ実施するカップルが増加していることも首都メキシコシティならではの特徴となっている。



オアハカの結婚式の特徴

オアハカ市を始めとしたメキシコ南東部の幾つかの都市では、結婚式を行うまでに最低でも一年の間に様々な準備を行う独特の文化が存在する。新婦となる予定の女性は、新郎となる予定の男性の母、つまり義理の母やその家族との共同生活を通じて料理の技術や家事の能力について親族に見定められ、義理の母からの許可がなければ結婚が許されない。また新郎予定者は新婦予定者の両親が住む自宅へ訪れ、フルーツやメスカルなどのアルコール飲料等をプレゼントする慣習が残っている。

非常に興味深いのは、双方の両親から結婚の許可を得た後に、新婦の両親は新郎に対して土地を購入、もしくは土地を譲渡する風習が存在する。与えられた土地に自宅を建築する際には、新郎は友人や親戚に対して自宅建設の無償協力を依頼し、結婚式までに自宅を完成させる必要がある。これらの無償協力は「ギラゲツァ」と呼ばれるサポテコ族起源の言葉で「お互いに助け合う」という文化に基づくものであり、これらの恩恵を受けた男性は、支援や補助に関わった人々に対して恩を返していくという風習が存在する。なお「ギラゲツァ」は7月上旬に行われるオアハカのフェスティバルの名称としても知られている。



オアハカの文化と観光事情に詳しいルイス・フェリペ氏にインタビューを行った



オアハカ市内の結婚式の様子

またオアハカ州はメキシコの他州と比べて所得水準が低いにも関わらず、結婚式は盛大に行う風習がある。先述したギラゲツァの文化がここでも関わってくるのだが、結婚式や披露宴の実施費用および参加者に振舞う食事やアルコールの提供にかかる費用の大半は親族や友人からの援助によって支払われる。個人の所得や貯蓄では賄えない結婚式、披露宴の費用をコミュニティや関係者を通じて補助を行い、実施される文化は独特である。

オアハカ州の伝統的な結婚式は3日間続く。初日は集落の組合メンバーからの祝福を主目的とし、2日目は結婚式と宴会の饗宴が行われる。パーティーの最中では「メディウシガ」と呼ばれるダンスを行い、カップルは賽銭箱のような箱を持ってダンスフロアの中心部に座り、参加者は賽銭箱にお金を投げて踊りを続ける。最終日には「ポットの洗浄」と呼ばれる儀式が行われ、新郎新婦は結婚式に使用した鍋や壺を洗う。この行事は新郎新婦が結婚の完了を発表する場として重要な行事と考えられ、その後深夜までパーティーが続くと言われている。

グアナファトの結婚式の特徴

世界遺産の街であるグアナファト市内では、その街の美しさからメキシコ人にとって結婚式を行う人気のスポットである。グアナファト市内の教会で結婚式が行われる際には、一般市民が立ち止まって祝福の言葉をかける光景が見られるように、大都市やリゾート地では感じられない牧歌的な雰囲気が漂う。

グアナファトでの結婚式の習慣や伝統について

一般的には当事者間で結婚の合意をした後、新郎および新郎の両親が新婦宅を訪れ、彼女の両親から結婚の許可を得る。結婚の許可が下りた場合には、結婚式の日程や詳細を計画する。ここで興味深いのは、結婚の許可を得る際の自宅訪問に、挙式の司式者となる司祭が結婚の証人として重要な立場となるため、しばしば同行するという点である。



結婚式が最も開催される時期について

グアナファト市に限らず、メキシコ国内の大半の地域では12月に結婚式が執り行われることが多い。その理由としては、多くのメキシコ人はクリスマス賞与を12月に受け取ることから、その賞与を結婚式の費用に充てることができるためである。夏の時期の結婚式も人気ではあるが、12月に開催される数は圧倒的に多い。この反動で、メキシコ人が活発に消費を行う12月以降の1月から2月は消費を控える傾向にあり、これらの時期に結婚式が執り行われることは少ないようだ。



結婚式の際に障害となること

メキシコで結婚を行う上で障害となる点が幾つか存在する。1つ目は、カトリック教会では、結婚は一度しか許可されていないことから離婚歴がある人々に対しては原則挙式を許可していない。また新郎新婦が薬物の使用をしている場合や、将来家族に害を及ぼす恐れのあるような、悪質な癖や心的傾向を持つ場合についても挙式の許可はおりない。一方で、教会法では近親婚として従姉妹間の結婚は禁止されているが、メキシコでは従姉妹間での結婚は教会の許可を取得すれば正式な結婚および挙式の実施が可能である。

メキシコ全土における葬儀の歴史や葬儀ビジネス

メキシコの文科省ホームページを参照すると、16世紀前後の時点では既に、当時の征服者であるスペイン人により墓地に花や食物を捧げる風習が存在していた。アステカ文明および中世スペインにおける死の風習が融合し、メキシコにおける代表的な死の表象である「死者の日」が生まれたとされている。

アステカ王国時代、生贄の儀式が行われていたことは有名である。神と崇められた生贄の心臓を取り出し、生贄の肉を食べる文化が存在した。死を光栄に思うアステカ古来の文明とラテンの陽気な国民性が加わって、メキシコ人の死生観は特殊なものとなったと考えられている。死は忌むべきものではなく、親しい身近なものだと考える人々は多々存在する。葬儀は故人の親しかった関係者同士で悲しみを分かち合い、明るい気持ちになるための場であると考えられる人々の間では、埋葬の際にマリアッチやブラスバンドが演奏を行うこともあるようだ。

メキシコの代表的な葬儀

INEGI(メキシコ国立統計地理情報院)の調査によると、2018年には約65万人程度が年間死亡している。また**COMESEF**(メキシコ葬儀研究所)によると葬儀関連の事業を行う企業は全国で5,000社程度にのぼると云われているが、その内40%は各許認可を取得せずにサービス提供を行うインフォーマルセクターであるようだ。

葬儀関連のビジネスにおける国内のリーディングカンパニーは**GAYOSSO**と**J Garcia Lopez**の2社である。**GAYOSSO**社は年間の売上が4億ペソ(日本円換算約20億円)を超えるメキシコ国内の最たる事業者である。また**J Garcia Lopez**社はメキシコ国内での問い合わせが年間23万件を超える主要企業の一つだ。これらの企業は幅広いサービス料金の設定や、先進的な技術を用いたイノベーションに取り組んでいる。



GAYOSSO 社運営のイラプアト市内施設内観



J GARCIA LOPEZ 社が運営する施設内観

一般的な葬儀の費用は日本円で約3万円から約120万円と幅広い料金設定となっている。喪主となる家族たちは、1ヶ月から半年の給料を家族の葬儀にかけることが平均的であるようだ。2020年5月現在、コロナウイルスの影響を受けて国内の死亡者が増加していることから、葬儀関連のビジネスを無許可で営業する企業が急増していることを **COMESEF** が発表した。以前から許認可の取得などを行わず、モラルや業界の知識を欠いた企業が葬儀の実施や埋葬を行っていることを同団体は問題視しており、今後より **COMESEF** がこれらの企業を取り締まっていくことに加え、営業許可を取得する企業に対してのセミナーや教育、サポートを以前に増して行っていくことが発表されている。

メキシコシティでの葬儀事例と特色

メキシコシティはメキシコ全土の人口の7%を占める巨大都市であり、その他各国の大都市と同様に、人と人との関わりやコミュニケーションが地方都市と比較すると少ない傾向にある。メキシコでは「家族や友人との関係や繋がり」が重要であると考えられているにも関わらず、孤独死や故人の引き取り人がいない問題などが年々メキシコシティでの社会問題となっている。

メキシコの建国の父と謳われ、先住民族から選出された初のメキシコの大統領として今も国民から愛されているベニート・フアレス氏の一族も埋葬されたサンフェルナンド墓地博物館(*Museo Panteón de San Fernando*)はメキシコシティ市内の中心地に位置している。建国の父が眠る墓地で、様々なイベントが国内外の観光客に対して年中行われており、特に死者の日の前後には多くの装飾がなされる。国民の英雄が眠る地で賑やかなイベントが催される文化は、日本のそれと大きく異なるように感じる。

メキシコシティの葬儀関連事業を行う **GAYOSSO** の広報担当者にインタビューを行ったところ、葬儀では、以前はカトリックの形式に則って黒い服を着用することが一般的であったが、メキシコシティにおいてはカジュアルな服装で参列する人々も増えており、時にジーンズを履いて参列する人々も見受けられるが、他の参列者から軽蔑の目で見られるようなことはないようだ。

またメキシコシティを中心に、犬や猫などのペット向けの葬儀ビジネスも近年盛んとなっている。代表的な企業として挙げられるのは **FUNERAL PET**。メキシコ国内で事業を開始して22年を迎えるが、近年欧米文化の煽りを受けて、メキシコ国内の中間層以上の家庭では主に犬をペットとして飼う家庭が急増している。中間層以上の人口が多いメキシコシティでは今後もペットの葬儀関連の事業を展開する企業が増加していくと考えられる。



サンフェルナンド墓地博物館の内観



サンフェルナンド墓地博物館敷地内の墓地エリア



ペット向けの葬儀サービスは年々市場拡大している

オアハカの葬儀事例と特色

先述の通り、オアハカ州は先住民がメキシコ全土で最も多く、ミステコ族、マサテコ族やサポテコ族の文明・文化がいまだに根強く残っていることから、特色のある葬儀が存在している。

オアハカ州の南部にあるクイラパン市やその近郊では、主にミステコ族が多く生活しており、葬儀が9日間連続で行われる風習が存在する。これはオアハカ州から出稼ぎで米国やメキシコシティなどの他都市に在住する親戚や友人たちも集まることが出来るように取り計らわれていると考えられている。集落の中で誰かが亡くなった朝には、早朝から爆竹が鳴らされ、葬儀開始の合図と考えられている。若くして亡くなった場合は白い棺桶に葬られ、人生を全うしたと考えられる場合は灰色もしくは黒色の棺桶が準備される。



メキシカンマリーゴールドが飾られた墓地



トウモロコシを原料とした伝統料理の調理風景

通夜では参列者に対して、パンやタマル(トウモロコシの皮などで包んで蒸した肉まんのような料理)などの食事に加えてアトーレと呼ばれるトウモロコシを原料とした穀物飲料やホットチョコレートが振舞われる。通夜の最終日となる9日目には、祈りの部屋に砂を撒いて、その砂を参列者が夜中まで掬っては祈りを捧げるようだ。9日間連続して執り行われる葬儀を通じて、親族はかなり疲弊するようだが、努めて笑顔で故人を送り出す。沢山の人々に明るく、長時間にわたって見送られる故人にとっては、非常に幸せな葬儀文化であるように感じる。

マサテコ族の死生観や葬儀の特色

大勢のマサテコ族が住む、ウアウトラ・デ・ヒメネスという集落ではネイティブメキシコ人の紀元前500年から続く伝統的癒しの儀式の風習が残る。マサテコ族は、口笛を使って数キロ離れた同じ民族の人々とコミュニケーションが取れるようだ。ここでの葬儀は40日間続くと言われている。ここで興味深いのは、故人が残っていたネガティブな雰囲気や悪霊を退散させるべく、故人の自宅で集落独自の植物を燃やし、植物が燃える匂いの中で自宅を掃除する習慣がある。また葬儀が続く間は性交渉が認められていない。

サポテコ族の歴史や文化

サポテコ族は紀元前5世紀の初頭にオアハカ州近辺で誕生し、その後1000年以上繁栄した。古代サポテコ文明の都市モンテ・アルバンはサポテコ文化の祭祀が行われた場所で、現在もその地名を残してオアハカ市街の西方10kmに存在する。

サポテコ族の葬儀は、愛する人の人生が全うされたことを祝福するものとして行われるため、葬儀は基本的に明るい雰囲気で行われ、ブラスバンドやマリアッチが演奏しながら棺桶を担いで行進する。サポテコ族は「*Be'ena' Za'a*」(ベエナザア)と呼ばれる、雲の上に住んでいた世界の創造者の存在を信じており、人々が亡くなった際には雲の上にその魂が帰っていくと考えられている。また葬儀の際には木製の箱に遺体を納め、来世への旅に必要と考えられる食物、飲料および洋服を添えるようだ。



サポテコ族の伝統行事に参加する子供達の様子



ルイス氏から提供を受けた先住民族家庭のオフレンダ



色鮮やかなサポテコ族の民族衣装



これらの文化が失われることに対する危機感

オアハカの文化や観光に詳しいルイス氏を通じてこれらの情報を得たものの、残念ながら、これらの先住民族の葬儀に参加したり写真撮影を行うことは難しいようだ。昨今では欧州や米国からの調査団や研究者の訪問についても受け入れが厳しくなっていると、村長やコミュニティにおける重要人物との人間関係を長い時間をかけて構築していく他、取材する方法はないようである。また以前これらの集落は先住民族言語の禁止指令などの制約を受けていたが、改められ現在は国や州政府によって先住民族言語の保護や再活性化施策が行われているようだ。

グアナファトの葬儀事例と特色

土葬の風習と独特の乾燥気候で、多くのミイラが自然に出来上がると言われているグアナファト市内には「グアナファト・ミイラ博物館」がある。ここでは約200体程度のミイラが保管され、多くの観光客が訪れる。

メキシコ国内では、墓地が置かれる場所の使用に税金の支払義務が発生する。税金の支払が長年行われない場合には墓地が掘り起こされ、ミイラとして状態の良い遺体はこの博物館で保管されるとの話もあるが、詳しい情報や条件については明らかとなっていない。



グアナファト・ミイラ博物館

グアナファト市内で長年、司祭として生活してきたオルメガ氏にインタビューを行い、メキシコにおける葬儀についての考え方や習慣、流れについて伺った。

司祭からみたメキシコ国内の葬儀とは

—カトリックにとって葬儀とは教会が推奨するものであり、死者を神の慈悲に委ねる儀式である。国民の大半がカトリック教徒である我々は逝去する際、肉体は「容れ物」のようなものにすぎず、魂は天国に招かれるか、償うべき罪がある場合は地獄に行くものと考えられています。そのため故人が亡くなった場合、最初に行われることは、死後の世界の決定を神に委ね、現世から天国に迎え入れて貰えるよう、また罪の赦免のためにミサの開催を依頼することが一般的である。葬儀を通じて、遺族や関係者たちは愛する故人が天国に行くことができると安心することが出来るのです。

メキシコ国内の葬儀における習慣や流れとは

—葬儀の間に、オラシオンやロザリオと呼ばれる祈りを行うことや、忠実な故人のために特別な祈りを行うことが挙げられる。また故人が逝去すると、その家族や友人、親戚が遺体の元へ集まり、一晩を共に過ごすことが一般的である。この通夜の間では、親族はパンなどの軽食に加えてコーヒーなどの飲料を参列者に提供する。その後、翌朝には近親者に見守られながら教会に運ばれ、ミサが執り行われる。ミサの終了後には、棺が人々に担がれ運ばれるか、霊柩車によって墓地まで運ばれるが、この葬送の行程はゆっくり時間をかけて行われ、最終的には墓地の前で故人に別れを告げ、葬られる。

メキシコの通過儀礼の特徴

- ・人口の約91%が信仰するカトリックの要素が強い
- ・基本的に女性はドレス、男性はスーツを着用
- ・イベントでは装飾や食事、特に音楽とダンスは欠かせない



フィエスタ・デ・キンセアニーニョスでは父親が娘に人形を渡すことで、少女から大人の女性への変容を祝う



女性のみ行う15歳のお祝い

Fiesta de quince años (フィエスタ・デ・キンセアニーニョス)はメキシコ国内の大部分で伝統的に受け継がれている。15歳は成人の年齢と考えられ、キンセアネーラ(15歳の女性)は美しいドレスを身に付け、家族や友人から盛大に祝われる。基本的にはホテルの会場などで行われ、DJやマリアッチがパーティーを盛り上げる。15歳まで立派に育ったことを神に感謝し、大人の仲間入りをしていつでもお嫁にいける年齢になったというフィアンセ候補達へのお披露目の意味合いも含まれるようになった。キンセアネーラの父親にとって *Fiesta de quince años* は結婚式と同程度、感慨深いものである。

金婚式と銀婚式

日本と同様に、メキシコでも結婚50周年及び25周年を祝う「金婚式」及び「銀婚式」の風習が存在するが、日本のそれと比べるとメキシコでの催しの内容は異なる。広い会場に家族、親族、友人などを招待し、夫婦をはじめ参加者が次々とダンスを披露する。半世紀、四半世紀に亘って共に生活したことを祝い、愛を長続きさせることを願ってパーティーが行われる。6周年や10周年を記念した節目はあるが、金婚式と銀婚式が最も貴重で価値のある記念日であると考えられている。所得レベルや家族構成によっても内容や参加者数に差はあるが、一般的には金婚式ではより華やかに、より多くのプレゼントが準備される。



金婚式では、参加する全ての女性は金色のドレスもしくは金色の刺繍が入ったドレスを着用し、人生で最も煌びやかな装飾で参加することが一般的である。また銀婚式では銀色または白色の花とリボンを選び、会場をその色調で飾り付ける。金婚式ではゴールドウェディングゲスト、銀婚式ではシルバーウェディングゲストと呼ばれる家族や親しい友人を招待する。ただ、結婚式ほど大勢の友人を招待することはないようだ。またこれらのイベントの実施については親族や親しい友人が事前準備を行い、費用の負担をすることが一般的である。



銀婚式では銀のドレスや装飾を纏う





「死者の日」の解説



楽しく明るく死者を迎え入れる姿

死者の日の装飾の特徴

現在メキシコでは10月31日の前夜祭から町中に華やかな飾りつけが施され、人々はお墓の前でお酒を飲んで歌ったり踊ったりと、死者の魂が帰ってくることを明るく盛大に祝う。11月1日は子供の魂、11月2日は大人の魂が戻る日とされ、供物がチョコレートなどのお菓子からメスカルなどのお酒へと変わっていくことは大変興味深い。日本のお盆に近い位置付けであるが、大きく異なる点は「楽しく、明るく祝う」ことである。お盆のように厳粛に故人を弔う日本の文化とは大きく異なり、陽気なメキシコ人の国民性が表れている。

「死者の日」について

「死者の日」は古い起源を持つメキシコの伝統行事であり、メキシコ人が愛する、国を代表する祝祭。アステカ文明時代の「ミクトランシトル(Mictlantecihuatl)」と呼ばれるアステカ神話の女神を主宰とした祭典と、カトリック教の祭典である「聖徒の日(11/1)」と「諸魂日(11/2)」が死者の日のルーツであると云われている。これは1521年にアステカ王国が征服された後、カトリックの神父達がメキシコでの布教を開始した直後から、アステカ古来の信仰とキリスト教との融合の過程で、11月1日のカトリックの祭日である「万聖節(諸聖徒・殉教者の霊を祭る日)」と11月2日の「万霊節(信者の霊を祭る日)」に合わせて「死者の日」が設定されたと云われている。



① オフレンダ

死者の日には、死者を弔うための「Ofrenda(オフレンダ)」と呼ばれる祭壇を作り、捧げものをする習慣がある。故人の写真が置かれ、その周りに故人が好きだった食べ物やお酒、色鮮やかな花やキャンドルで華やかな飾りつけが施される。



② センパスチル

Cempasúchil(センパスチル)とは、メキシカンマリーゴールドのこと。死者の日の期間、市街地はマリーゴールドの花が多く立ち並ぶ。マリーゴールドの花には「死者の世界から、死者を祭壇まで運んでくれる」という言い伝えがある。



③ お墓の飾り付け

死者の日には、死者を迎えるためにお墓を飾りつける習慣がある。花やキャンドルでお墓を派手に、そしてにぎやかに飾り立てる。殆どのお墓ではマリーゴールドが飾られる。

「死者の日」の歴史

死者の日の歴史について語る上で、アステカ国家時代の冥界の王「ミクトランテクトリ」の妻であり、死の女神と崇められた「ミクトランシワトル」は欠かせない。死の女神を主宰とした「死者の小祝宴」と呼ばれる祭典は当時、アステカ暦第9の月(7月24日から8月14日)に行われていた。

死の女神ミクトランシワトルを祀るためにアステカの時代に行われていたこの祭典が、現在の「死者の日」の起源であると言われ、この祭典が後にカトリック教の祭典である「聖徒の日」の影響を受けて現在の死者の日の誕生したという説が最も有力である。諸説では紀元前1200年頃から紀元前後にかけて栄え、メソアメリカ文明の母体となったと考えられているオルメカ文明の時代には既に、死者の日に類似した儀式や祭典が存在したとも言われている。

骸骨が死者の日のシンボルとなった背景

スペイン統治時代を経て、征服者と被征服者の子供として誕生した人々が自身のアイデンティティに悩み、先住民族の文化を否定され続けたことで、肌の色を欧州人のように白く塗るようになってしまった。当時のメキシコにおける貧富の差は非常に激しく、征服者たちが先住民族文化を悉く破壊していた状況に対して危機感を抱いた著名な画家ホセ・グアダルルーペ氏が、当時の伝統文化であった「死者の礼拝」を守るためにある物語を書いた中で、風刺の意味も込めて挿絵として描かれたのが「カトリーナ」であった。「カトリーナ」は元々骸骨ではなく、肌を白く塗りたくった先住民族の女性であったが、その後その白い化粧が骸骨にみたてられ、骸骨が死者の日の象徴としてメキシコ中に広がっていったのである。現在、死者の日は世界中の人々が訪れる一大イベントとなっており、街中では骸骨の貴婦人に扮した人々が多数見受けられるが、この特殊メイクの名前も「カトリーナ・メイク」と呼ばれている。

死者の日のシンボル = 骸骨 となった一枚の挿絵



死の女神「ミクトランシワトル」の彫像



カトリーナ・メイクと呼ばれる特殊メイク

各都市の結婚式場や葬儀場などの紹介

最後に、メキシコへ視察旅行に訪れる際に必ず立ち寄るべき主な結婚式会場や葬儀会社を紹介する。また、できればメキシコの渡航の時期は11月1、2日の「死者の日」の前後にして、オアハカ市内の墓地にもぜひ立ち寄りたい。目の前に広がる無数のマリーゴールドが蝋燭に照らされ、夜空の下で故人を想う人々の姿はすばらしいメキシコの記憶として心に残るに違いない。

各都市の有名な結婚式場



メキシコシティ市内:

Catedral Metropolitana de México, Centro Histórico

(カテドラル・メトロポリターナ デメヒコセントロ ヒストリコ)

メトロポリタン大聖堂

メキシコ国内最大級の大聖堂。カトリック宗徒のみが結婚式を行うことができる場所であり、聖母マリアの被昇天に捧げられた寺院であることでも知られている。



グアナファト市内:

La Basílica Colegiata de Nuestra Señora de Guanajuato

(ラバシリカ コレヒアタ デヌエストラ セニョーラ デグアナファト)

グアナファト大聖堂

色鮮やかなバロック様式の大聖堂。グアナファト市内の中心地に位置し、市内散策の起点となる場所でもあることから一般市民のみならず、観光客でも賑わう。アメリカ大陸に現存する最古の聖母マリアの木像があり、グアナファト聖母大聖堂とも呼ばれている。



オアハカ市内:

Santo Domingo de Guzmán (サント・ドミンゴ・デ・グスマン)

グスマン大聖堂

1575年から1666年にかけて建造された寺院。メキシコ最高のバロック建築との呼び声が高く、身廊の壁を埋め尽くす装飾や黄金細工は圧巻。



J. GARCÍA LÓPEZ社の施設外観



GAYOSSO社の提供する一般的な棺桶

メキシコシティの葬儀会社



GAYOSSO

メキシコ国内で葬儀関連の事業を145年以上続けるリーディングカンパニー。
ガジョツ・ムガリエタ氏が自身の母親を亡くしたことをきっかけに1854年に創業した。



J. GARCÍA LÓPEZ

メキシコ国内の主要なエリアの約35%のシェアを占める代表的な葬儀会社。
1981年に創業し、現在は年間の問い合わせ数が27万回を超える企業に成長している。



「死者の日」に賑わうオアハカ市内の墓地

Xoxocotlan (ホホコトラン)

市内から車で15分程度に位置する、死者の日に最も賑わう墓地の一つ。マリーゴールドで飾り付けられたお墓を、家族が囲み、和やかな雰囲気と独特の文化に触れることができる。



Atzompa (アツオンパ)

無数の蠟燭が揺らめき、人々がお墓のまわりに集まっている光景は言葉を失うほど美しい。一晩中その火が途切れることのないよう、人々が明け方まで火を灯し続ける。



メキシコ合衆国における冠婚葬祭事情

発行日: 2020年6月

発行者: 〒105-0003東京都港区西新橋1-18-12 COMS虎ノ門4階

Tel: 03-6273-3930

制作: 一般財団法人冠婚葬祭文化振興財団冠婚葬祭総合研究所

編集・デザイン: 株式会社Encounter Japan

<http://encounter-japan.com>

冠婚葬祭総合研究所

Ceremonial Occasions Research Institute

Copyright© 2020 冠婚葬祭総合研究所. All rights reserved.